

[シンポジウム]

## 関係発達臨床からみた自閉症とことば

東海大学健康科学部社会福祉学科

小林隆児

[要 旨]

コミュニケーションの発達に深刻な問題をもつ自閉症の臨床において、彼らにみられる多様な障害像が対人関係障害の質的問題とどのように関連しているかをわれわれは関係発達臨床の観点から検討している。本稿ではとりわけことばの問題に焦点を当て、対人関係の問題がその障害像にどのように深く関わっているのかを論じた。

未分化で原初的な知覚様態に強く依拠したコミュニケーション世界から次第にわれわれのような高度に分化した知覚機能に依拠したコミュニケーション世界へと発達していくことが認知機能（ことば）の獲得過程と見なすことができる。しかし、自閉症の人々においては加齢を経ても原初的なコミュニケーション世界に強く依拠した状態が続くゆえに、独特な世界体験を蓄積していると考えられる。自閉症にみられる独特な原初的な知覚様態とそれに依拠した原初的なコミュニケーション世界がいかなるものかを考えながら、彼らの対象知覚と体験の特徴を描き出し、そこにおいて発せられることばのもつ意味を論じるとともに、われわれとの間に深刻なコミュニケーションのズレがもたらされることを示した。

人間の精神発達には未分化な原初的な段階から、次第に分化と統合へと進んでいく過程であるが、自閉症の人々では加齢を経ても原初的な知覚様態がいつまでも活発に働いている。このことは、本来であれば急速に進んでいく未分化な知覚様態から分化した知覚様態へ、分化と統合へと進む生物学的成熟過程と精神発達過程が円滑に行われないことを意味している。対人関係障害の質的検討の中から障害（像）を捉え直し、自閉症の人々の障害（像）の（関係）発達論的意味を明らかにすることが、彼らへの関係発達支援のあり方にもつながっていくと思われる。

◆ *Key words* : 関係発達臨床、原初的な知覚、自閉症、ことば

はじめに

これまでの医学を始めとする科学の世界では、発達や障害は「個人」を中心にして考えられ、「(養育)環境」はあくまでも副次的なものとして取り扱われてきた。しかし、昨今、「個人」の究極的な次元ともいえる遺伝子研究が進むにつれ、皮肉なことに「環境」の重要性がより一層浮かび上がりつつある。さらには、国際生活機能分類(ICF)では、障害は個人と環境の相互作用の結果の産物として、明確に位置づけられるようになってきた。「個人(素質)」と「環境」がどのように相互に影響を及ぼし合いながら発達(障害)がもたらされるのか、その実態を明らかにするための新たな発達(障害)研究のパラダイムが今求められている。

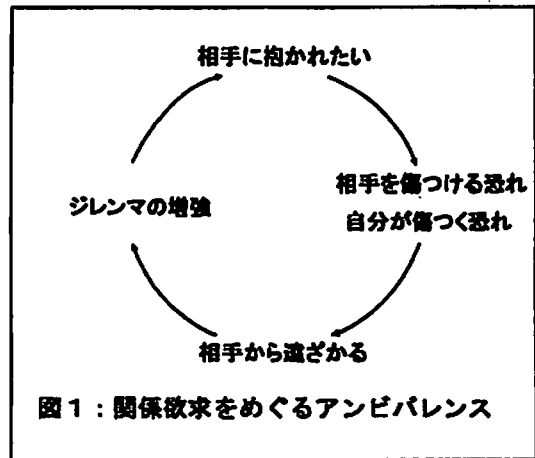
人間の発達が個体と環境の相互作用によって日々営まれていることは、素朴に考えれば至極当然のことであって今更言うまでもないことかもしれない。しかし、これまでわれわれが子どもの発達(障害)を理解する際に用いている概念装置の多くは「個」に立脚したもので、「関係(性)」の内実を捉えるための枠組みは極めて乏しかったことに改めて気づかされる。

コミュニケーションの発達に深刻な問題をもつ自閉症臨床に従事する中で、筆者は自閉症にみられる多様な障害像が対人関係障害の内実とどのように関連しているかを考えてきた。ここでは自閉症にみられることばの問題に焦点を当てながら、対人関係の問題がその障害像にどのように深く関わっているのか考えてみたい。

### 1. 自閉症にみられる関係欲求をめぐるアンビバレンスと関係障害

自閉症の(自閉性障害を有する)人々は他者との関わり合いを好まない、拒否していると単純に考えることはできない。彼らは関係欲求(愛着欲求)という本能的欲求を潜在的にはもっているにもかかわらず、いざ(主たる)養育者と関わり合

おうとすると、なぜか回避的行動をとってしまう。そのため他者との関係は常に緊張を生みやすく、そこに関係の悪循環が生じる。接近・回避動因の葛藤とそれに基づく関係の悪循環である。ここでの彼らの心的状態はやまあらしジレンマに極めて類似した状態にあると考えられる。彼らは他者に対して関わり合いたい欲求を抱くが、いざ関わり合おうとすると自分が傷つく恐れや自分が他者を傷つける恐れを抱くために、他者から離れて(回避して)しまう。その結果愛着関係は深まらない。このような心的状態をわれわれは関係欲求をめぐるアンビバレンス(図1)と称している。こうして両者のあいだに負の循環が生じ、双方ともに関わり合うことの困難さが雪だるま式に肥大化していくことになる。このような関係のありようをわれわれは「関係障害」として捉え、その関係の悪循環をいかにして断ちきるかということに支援の力点を置いている。



### 2. 未分化な知覚様態としての原初的知覚様態

自閉症児と養育者とのあいだに愛着関係が深まりにくいのは、彼らにはいつまでもたっても安心感が生まれにくい。その結果、生来的に著しい<知覚-情動>過敏をもつ自閉症児はより一層外界に対して警戒的な構えを取るようになる。警戒心はさらに<知覚-情動>過敏を強めるという負の循

環をもたらすことになる。

このように安心感の有無という情動のありようと、外界に対する知覚のありようは密接に関連し合っていることがわかるが、これは原初的知覚様態という未分化な知覚の働きによるものであって、われわれが通常五感として論じている高度に分化した知覚とは性質を異にすることを忘れてはならない。

### 3. コミュニケーションの基盤としての原初的コミュニケーションの特徴

一般にコミュニケーションといえば、象徴機能を有する媒体を介したコミュニケーション（象徴的コミュニケーション）を考えやすいが、いまだことばを獲得していない自閉症児は、先に述べた原初的知覚様態に強く依拠したコミュニケーション、すなわち原初的コミュニケーションの世界に生きている。ここでは情動水準での対人交流が中心的役割を担っている。われわれがこの世界を理解することを困難にしている最大の要因は、このコミュニケーション世界が意識を介しない心的過程だということにある。そのため当事者さえもアクチュアルに捉えることが難しい。たとえ捉えたとしても事後的にしか不可能だということである。

### 4. 原初的知覚様態とその体験様式

体験世界を意味あるものとして分節化することの困難な彼らは、ひとつひとつの体験をグローバルな形で把握していると考えられる。そこではく情動>過程、<運動>過程、<知覚>過程などが分節化されることなく、すべてが渾然一体となって体験され、<運動-知覚-情動>体験とでも表現できるものである。

### 5. 原初的知覚様態と自閉症にみられることば

彼らの体験そのものはわれわれのそれと本質的にさほど変わらないと思われるが、その（情動）

体験を象徴するものとしてのことばは、われわれのように普遍性をもった（私たちの共同世界で共通理解可能な）表現ではなく、極めて具体的で彼とその体験を共有した者にしかわからないようなモノ（あるいはコト）によって表されていることが多い。彼らの言語発達病理とされている隠喩的表現や遅延性反響言語と称されているものがこれに該当する。このような原初的知覚様態に強く依拠したコミュニケーション世界では、話しことばのもつ意味は非常に文脈依存的になる（図2）。

このように、彼らが原初的知覚様態優位なコミュニケーション世界に生き、われわれは視聴覚優位に高度に分化した知覚様態でのコミュニケーション世界で主に他者と関わり合うことが、彼らとわれわれとの関わり合いにおいて、深刻なズレを生み出す大きな要因となっている（図3）。

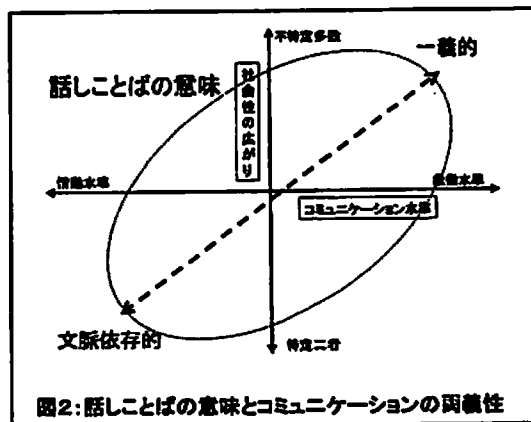


図2: 話しことばの意味とコミュニケーションの両義性

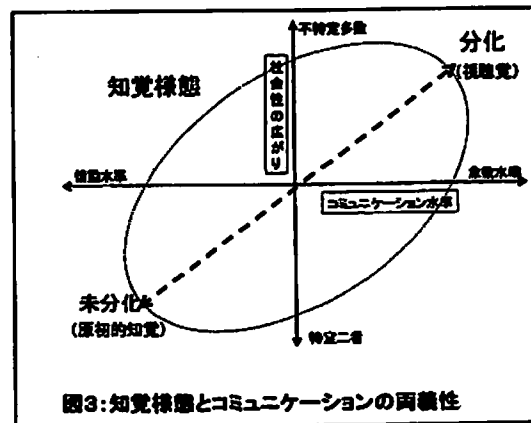


図3: 知覚様態とコミュニケーションの両義性

## 6. 原初的知覚様態と発達過程—分化と統合

われわれ人間は生誕後の成長過程で人間らしい精神機能を主たる養育者を初めとする他者との濃密な対人交流を通して獲得していくが、原初的ということは、それ以前（あるいはそのごく初期）の段階にあって、本能的な生物学的機能が優位な状態を指している。大脳でいえば発生学的に古い部分である脳幹や大脳辺縁系などが中心となって営まれているものである。

人間の心の働き（精神機能）は、その後の成長によって急速に高度に発達していくが、それを担っているのは主に大脳皮質の中でも新皮質とされている部分である。動物の中でも人間においてもっとも肥大化しているのがこの部分である。このような生物学的変化に支えられて、私たち人間の心の働きは急速に細分化（分化）されていく。人間の成長過程は、このような脳の発生学的に古い部分（主に古皮質）と新しい部分（新皮質）が密に連結し合いながら分化と統合を繰り返していくものだということができる。

人間の精神発達には未分化な原初的段階から、次第に分化と統合へと進んでいく過程であるが、彼らでは加齢を経ても原初的知覚様態がいつまでも活発に働いているということは、本来であれば急速に進んでいく未分化な知覚様態から分化した知覚様態（私たちのような視聴覚優位な知覚様態）に、分化と統合への過程が円滑に行われなことを意味している。

### おわりに

自閉症にみられる独特な原初的知覚様態とそれに依拠した原初的コミュニケーション世界がいかなるものかを考えながら、彼らの対象知覚と体験の特徴を描き出し、そこにおいて発せられることばのもつ意味を考えてみた。対人関係障害の質的検討の中から障害（像）を捉え直し、自閉症の人々の障害（像）の（関係）発達論的意味を明らかにすることが、彼らへの関係発達支援のあり方

にもつながっていくと思われる。

### <参考文献>

- 1) 小林隆児. 自閉症とことばの成り立ち. 京都：ミネルヴァ書房, 2004
- 2) 小林隆児. 発達障害における「発達」について考える. *そだちの科学* 2005; 5: 2-8
- 3) 小林隆児, 鯨岡 峻 (編著). 自閉症の関係発達臨床. 東京：日本評論社, 2005

# Autism and Speech as Captured From the Clinical Viewpoint of Relational Development

Faculty of Social Work, Tokai University School of Health Sciences.  
Ryuji Kobayashi, M.D., Ph.D.:

## **[Abstract]**

We have been examining how the serious clinical problems in communication development among autistics are associated with qualitative problems in the interpersonal relationship from the clinical viewpoint of relational development. In this paper, focus is placed on the problems surrounding speech in particular, in discussing how problems regarding the interpersonal relationship are deeply associated with the clinical picture.

The gradual development from communication relying heavily on an undifferentiated and primordial mode of perception to that dependent upon the highly differentiated perceptive functions we are familiar with may be considered the process of acquiring the cognitive function (speech). However, it is believed that continuation of a condition of strong reliance on the primordial level of communication even with aging culminates in the autistic subject accumulating their distinct experience of the outer world. Object perception and characteristics of experience as perceived by autistic subjects are portrayed in conjunction with their primordial world of communication constructed upon their distinct primordial modes of perception, alongside discussion of the meaning of words uttered within such contexts, and indication of how this brings about serious discrepancy in communication between such subjects and ourselves.

The process of human mental development is the process of gradual differentiation and integration from the undifferentiated, primordial stage. For the autistic person, however, primordial modes of perception remain active even with aging. This implies obstruction somewhere in the process of rapid transition from the undifferentiated to the differentiated modes of perception, and in the process of biological maturation and mental development, from differentiation to integration. It is believed recapturing the clinical picture through qualitative examination of the relationship disturbance, and clarifying the significance of relational development within the clinical picture of autism should lead the way on to effective modes of intervention in support of relational development.

**Key words** : Clinical approach from the viewpoint of relational development, primitive perception, autism, speech